

研究No.
(記載不要)

平成 23 年度配分 研究成果の概要

研究名	多文化共生社会の実現に向けた 交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究				
特別研究費 配分額	文化芸術研究センター長特別研究費				千円
特別研究費 執行額	5,400千円				
研究者氏名 (代表者)	学部名	学科名	職	氏名	共同研究の 場合の分担
	文化政策	国際文化	教授	池上重弘	研究の統括、交流支 援に関する研究、ブ ラジル・韓国調査
共同 研究 者	文化政策	国際文化	准教 授	広瀬英史	学習支援に関する研 究、韓国の先進事例 の調査
発表の方法 (予定で可)	1 紀要		号数	第 年 号 (年 月発行)	
	2 学会等での発表 学会等名:		発表日 (発表 予定日)	平成 年 月 日	
	3 その他 発表の方法: 報告書 『日本語指導者の育成とその支援組織づ くり-外国人コミュニティの自立と生活支援に 向けて-』(静岡文化芸術大学)		発表日	平成24年3月 31 日	

注:配分を受けた翌年度の7月未までに提出

(様式第2号)

研究No. (記載不要)	— —
-----------------	-----

平成23年度配分 研究成果発表報告書(実績)

研究名	多文化共生社会の実現に向けた 交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究				
配分を受けた 特別研究費	文化・芸術研究センター長特別研究費			5,400 千円	
研究者氏名 (代表者)	学部名	学科名	職	氏名	共同研究者
	文化政策	国際文化	教授	池上重弘	他 1 名
発表の方法	1 紀要 名称:		号数	第 号 (頁～ 頁) (年 月発行)	
	2 学会等での発表 2013年10月12日に本学を会場に 研究成果を発表するシンポジウムを 開催予定		発表日	平成25年10月12日 (予定)	
	3 その他 発表の方法:論文集 『卒業論文集 第1集』 (静岡文化芸術大学 国際文化学科)		発表日	平成24年3月	

※ 学会等での発表及びその他の場合は、学会報等発表を証する資料を添付すること。

※ 配分を受けた翌年度の3月末までに提出

(研究の目的等)

別紙の通り。

(研究の実施方法等)

別紙の通り。

(得られた成果等)

別紙の通り。

文化・芸術研究センター長特別研究

テーマ ① 多文化共生を含む地域社会発展に向けての文化政策に関する研究領域

多文化共生社会の実現に向けた交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究

(研究代表：池上重弘、共同研究者：広瀬英史)

平成 23 年度分成果の詳細報告書

平成 25 年 3 月 29 日

研究目的

静岡県では平成 23 年 3 月に「県多文化共生推進基本計画」を策定し、多文化共生施策に関する体系的取り組みを始めた。本研究では、静岡県における重要な地域課題の一つである多文化共生を取り上げ、本学の独自性を活かした実践的活動を通して、多文化共生社会実現に向けた交流支援と学習支援のあり方を探る。

学生が関わる地域貢献活動を展開し、その成果を検証することにより、多文化共生の先進地である浜松から大学が主導する支援活動のモデル事業として全国に発信するため、初年度の平成 23 年度は以下に述べる 4 つのプロジェクトを進めた。

【1】交流支援

1-1 まりまりプロジェクト

- 1) 長上地区の地域交流プロジェクト
- 2) 日本ブラジルお芝居出前プロジェクト顔見せ公演

1-2 多文化共生ワークショップ

- 1) あいさつゲーム
- 2) すごろくトーク

【2】学習支援

2-1 日本語教育支援

- 1) 学生への日本語指導力養成
- 2) 地域への日本語支援

2-2 磐田市での外国人中学生学習支援

- 1) 磐田市多文化交流センターでの外国人中学生放課後学習支援
- 2) 本学での中学生との交流イベント

以下、それぞれについて詳述する。

【1】交流支援

1-1 まりまりプロジェクト

プロジェクトに至る経緯

このプロジェクトは、東京をベースに活躍する「お芝居デリバリーまりまり」と日伯交流協会、浜松国際交流協会、そして本学とのコラボにより、多文化共生事業の一環としてお芝居を介して地域の公立学校と外国人学校、公民館等をつなぐ地域交流プロジェクトと、日本とブラジルをつなぐ「日本ブラジルお芝居出前プロジェクト」の2つの柱からなる。

まりまりの演目の多くは日本の昔話を題材としたものでありながら、独特の解釈を加え、文化の壁を越えて世界中の人々にアピールする普遍的な力を持っている。一見すると喜劇風、さらに言えば声帯模写付きパントマイムのようにも見えるが、その実、深いところまで計算された演出と緻密なりハーサルに裏打ちされた精度の高い芸術であることがわかる。

まりまりは国内の学校や文化施設での公演経験が豊富で、フランス、メキシコ等、海外での公演経験も有している。平成22年5月の「路上演劇祭2010 in はままつ」でまりまりの芝居を見、その後本学で開催した路上演劇祭シンポジウムでの報告を聴き、まりまりのもつ「つなぐ力」を活かした多文化共生事業の展開を企画した。

平成22年度の特別研究の一環として平成22年11月に「お芝居デリバリーまりまり『多文化共生実験教室』」を実施し、お芝居を通じた多文化共生の素地作りの可能性を探った。外国人児童の多い浜松市立遠州浜小学校と南米系外国人学校のムンド・デ・アレグリア校の2校で実験的なお芝居公演を行った。この企画は社会的注目度が高く、遠州浜小学校での公演の様子はNHKニュースでも放映されたほか、中日新聞でも報道された。

1) 長上地区の地域交流プロジェクト

浜松市東部の長上地区にある与進中学校と近隣のブラジル人学校エスコラ・アレグリア・デ・サベール(EAS)は平成22年度から地区清掃活動等を通じて交流が始まったが、その連携はまだ一時的かつ断続的な段階に留まっており、生徒たちの相互理解につながるものには至っていない。また、EASの存在は長上地区の住民の多くにとっては、「見えないう存在」のようになっており、地域住民との間に「顔の見える関係」は成り立っていない。そこで、与進中学校英語部とEASの連携を軸に、地区の子どもたちを巻き込んで、地域におけるアクターとしてEASが認知されるよう交流プロジェクトを展開した。

具体的には、以下の公演・ワークショップを実施した。

平成23年6月10日 静岡文化芸術大学での公演とワークショップ

平成23年9月30日 長上公民館での試演会

平成23年10月21日 与進中学校英語部での公演とワークショップ

平成23年10月22日 長上公民館で「与進の会」主催の子ども向け公演

平成24年3月25日 志道館児玉道場での公演

平成24年3月26日 与進中学校英語部での公演とワークショップ

平成 24 年 3 月 27 日 E A S での公演とワークショップ

2) 日本ブラジルお芝居出前プロジェクト顔見せ公演

日本ブラジルお芝居出前プロジェクトとは、世界各国で国際交流お芝居を上演する「お芝居デリバリーまりまり」が 2011 年～2012 年に日本とブラジルで行う、両国の交流お芝居プロジェクトである。日本とブラジルを 2 往復し、双方にお芝居を届ける。お芝居をみた観客から映像や寄せ書き等のメッセージを受け取り、上演会・パネル展で相手国に届けるサイクルを両国で交互に 2 年間繰り返すことにより、両国の人々の間で相互理解が深まることを目的としている。まりまりがお芝居を届けると同時にメッセージを受け取って運ぶ“伝書鳩”のような役割を果たして日本とブラジルをつなごうという企画である。お芝居会を媒介にメッセージが海を渡り、両国の人々をつなぐことになる。

ブラジルでの公演は、主に日系人コミュニティを対象に行った。その目的は次の 4 点であった。

- ① ブラジルの日系 1 世の高齢者に日本の昔話を届ける。
- ② ブラジルに帰国した子どもたちに元気を届ける。
- ③ ブラジルで日本語・日本文化を学ぶ子どもたちに昔話を届ける。
- ④ ブラジルからメッセージを持ち帰り、日本での日伯交流お芝居会に活かす。

ブラジル公演に向けた浜松での試演会と、ブラジルでの公演のスケジュールは以下の通りであった。

平成 23 年 5 月 13 日 日伯交流協会 5 月理事会での企画プレゼンと試演会

平成 23 年 6 月 10 日 日伯交流協会 6 月例会での試演会

平成 23 年 8 月 28 日～9 月 8 日 ブラジル・サンパウロ州での顔見せ公演 (2 週間)

場所：ブラジル、サンパウロ州 (サンパウロ市、スザノ市、ピラール・ド・スール市)

協賛：[静岡文化芸術大学](#)、[日伯交流協会](#)

後援：在浜松ブラジル総領事館

出演：[お芝居デリバリーまりまり](#) (萩原ほたか“ほた”、寺本雅一“もっちょ”)

特別出演：池上重弘 (ピアノ演奏)

主な公演：

- 9 月 1 日 (木) ブラジル日系老人クラブ連合会 (サンパウロ市)
- 9 月 2 日 (金) ブラジル宮城県人会 (サンパウロ市) 【一般公開】
- 9 月 3 日 (土) イペランジャホーム (スザノ市の高齢者福祉施設)
- 9 月 5 日 (月) 日伯学園 (スザノ市の学校)
- 9 月 6 日 (火) ピラール・ド・スール日本語学校
- 9 月 7 日 (水) ピラール・ド・スール市の日系人の集まり
- 9 月 8 日 (木) ブラジル静岡県人会 (サンパウロ市) 【一般公開】
- 9 月 8 日 (木) AMAMI 会館 (サンパウロ市のブラジル人児童福祉施設)

参考資料

- ・静岡新聞記事（平成 23 年 6 月 11 日）
創作劇で多文化共生へ 静岡文化芸術大 ブラジルと日本 子どもの共演企画
- ・中日新聞記事（平成 23 年 6 月 11 日）
心通うブラジル公演に 移民のお年寄りらへ 出前芝居計画 静岡文化芸術大生ら
- ・朝日新聞記事（平成 23 年 8 月 20 日）
日本の昔話 移民 1 世へ ブラジルで芝居「出前」
- ・ブラジルの邦字新聞「ニッケイ新聞」
[昔話を移民、帰伯子弟に＝お芝居出前プロジェクト＝日本の俳優集団まりまり](#)
お芝居デリバリーまりまり 老ク連で伯国初黒鉛 約 60 人の笑い声響く
- ・ブラジルの邦字新聞「サンパウロ新聞」
日本昔話や世界童話を芝居で上演「お芝居デリバリーまりまり」が来伯
「大きなカブ」で会場も一体に 「お芝居デリバリーまりまり」公演
- ・静岡新聞記事（平成 23 年 10 月 7 日）
（時評）浜松で「見えない」外国人 「精神的な障子」開けるか
- ・静岡新聞記事（平成 23 年 10 月 18 日）
日本とブラジル、交流広がれー芝居の「出前」始動
- ・お芝居デリバリーまりまり作成
日本→ブラジルお芝居出前プロジェクト 第 1 弾・2011 年ブラジルツアー報告書

1-2 多文化共生ワークショッププロジェクト 2011

これは、大学生が教室で学んだことを単に自分の知識として蓄積するだけでなく、大学を飛びだして地域に還元することにより、小学校と大学の間で持続的な協力関係を築いてゆこうとするプロジェクトである。そもそも学生のアイデアをきっかけとした企画で、国際文化学科の学生有志で実行委員会を組織し、平成 23 年 6 月から本格的に活動が始まった。参加メンバーは 1 年生から 4 年生まで及び、総勢 20 名ほどになった。

1) あいさつゲーム

浜松市内で外国人児童がもっとも多い南の星小学校と、一人もいない東小学校を対象として選び、11 月から 12 月にかけて各校 2 回ずつ、計 4 回のワークショップを実施した。1 回目は世界のさまざまな国・民族の挨拶を体験する「あいさつゲーム」を行い、自分たちのあいさつ以外にもたくさんのあいさつがあり、自分にとっての当たり前は他の国の人にとっては当たり前ではないことを学んでもらった。

2) すごろくトーク

2 回目のワークショップは「すごろくトーク」であった。これはサイコロを振って止まった場所を書いてある質問に答えるゲームである。たとえば、「朝起きて一番はじめにすることは？」という質問でも、人によって答えはかなり違う。こうして、友だちとの会話か

ら、身近な異文化、小さな異文化に気づいてもらった。

つまり、1回目のワークショップではあいさつの多様性を知ることにより文化相対主義的視点に立つ大切さを学んでもらい、2回目のワークショップでは国や民族という枠組みだけが多様性の単位となるのではないと理解することにより、文化本質主義（ステレオタイプ的見方）に潜む危険性を認識してもらった。文化相対主義や文化本質主義といった異文化理解における重要な概念を、それらの専門用語を用いることなく子どもたちに理解してもらうにはどうすればよいか——。ワークショップの準備と実施は、大学生にとっても知識と実践を結びつける絶好の機会となった。

参考資料

- ・静岡新聞記事（平成23年11月28日（日）p.19）
「外国の文化に触れて 静岡文芸大生がワークショップ 浜松東小 各国あいさつ学ぶ」
- ・静岡新聞記事（平成23年12月9日（金）p.21）
「ゲームで異文化体験 南区・南の星小 文芸大生がワークショップ 生活習慣の違い学ぶ」

【2】学習支援

2-1 日本語教育支援

1) 学生への日本語指導力養成

ブラジル人学校エスコラ・アレグリア・デ・サベール（EAS）浜松校と本学日本語教員養成課程の相互学習を行ってきた。毎回、EASからは生徒6～10人、本学学生からは12名が参加した。1年間、授業見学と授業実践を行った。本学学生にとっては、ブラジルの教育を学ぶ機会と年少者への日本語指導の機会が得られた。ブラジル人学校（EAS）と本学の共同講義で新しい試みであったが、我々はもちろんEAS側にも生徒の学習意欲の向上、生の日本語に触れる機会の増加などの点で好評であった。

2) 地域への日本語支援

1月11日（水）にブラジル・サンパウロ州のピラル・ド・スール日本語学校から日本語教師の渡辺久洋氏を招き、特別講演会「ブラジルにおける継承日本語教育」を本学にて開催した。平日昼間にもかかわらず、65名（うちほぼ半数は学外者）の参加があった。

2月4日（土）には、浜松に住む外国人に対して日本語支援する人々に向けた講演会、セミナー「外国人学習者の未来への歩みに向けて」を本学にて開催した。

これらの企画により、本学が浜松の中心的な役割を果たすべく情報発信をした。平成23年度は情報発信を中心としたが、平成24年度以降はこの分野で本学が果たしうる実質的な役割について検討し、活動内容を明確にしていく予定である。

参考資料

- ・静岡文化芸術大学公式HP上での特別講演会「ブラジルにおける継承日本語教育」紹介
- ・特別講演会（平成23年1月11日開催）のチラシ
- ・静岡新聞記事（平成24年1月14日（土）p.19）

「ブラジルで10年 日本語教育に力 文芸大で教諭講演」

2-2 磐田プロジェクト

プロジェクト開始の経緯

磐田市多文化共生社会推進協議会では多文化共生をめぐる課題のひとつとして、外国人中学生の高校進学率向上を掲げ、そのための支援策について検討してきた。同協議会の会長でもある池上は、外国人中学生の放課後学習支援のニーズに本学の学生たちが応えることができるとの判断のもと、磐田市、磐田市多文化交流センター（以下、センター）、地元自治会の関係者との間で、センターでの中学生の学習支援に対する本学学生の協力について調整した。また、平成23年3月25日に磐田市の多文化共生に関する提言書を市長に手交した際、磐田市長からも協力の依頼を受けた。平成23年度に入ってから、大学院生・学部生にこの学習支援プロジェクトへの参加を呼びかけたところ、大学院生を含む学生たちが参加の意思を表明した。

活動の概要

1) 磐田市多文化交流センターでの外国人中学生放課後学習支援

磐田プロジェクトに参加している学生は10名（大学院1年生1名、学部4年生1名、3年生3名、2年生3名、1年生2名）であった。活動は週に3回（水曜日、金曜日の支援教室、水曜日昼休みのミーティング）で行っている。センターでの活動は水曜日、金曜日の夕方に中高生に対して学習支援を行っている。教室に登録している中高生は15名である。1回の教室は1時間で、生徒平均4～8名、センターの先生常時2名、大学生平均2～3名という構成で、生徒と支援者1対1での学習をしている。

この学習支援活動は行政、地域、大学が一体となって市内に住む外国人生徒の学習サポートを目的としている。そのため、定期的に磐田市役所の職員の方々、センターの先生方、大学生の意見交換を行い、活動の改善点を話し合っている。大学生がこの活動に参加する意義は中高生と年齢が近いために親しみやすく、身近な相談相手となれる点が大きい。また、大学生との交流をすることで中高生が進学へのイメージを持つことも期待できる。実際、約1年間の活動を通して、中高生と大学生の距離は縮まり、中高生は学校の話や将来の夢などを語ってくれるようになった。

2) 本学での中学生との交流イベント

夏休みには交流イベントを本学で行い、ゲームやスポーツを通して親睦を深めることができた。また、このイベントには市役所の職員方やセンターの先生方も参加して下さり、

共に支援活動をしているという意識を共有することができた。10月にはセンターでのなかよし会に学生が参加し、普段接することのできない外国人小学生や地域の方とふれあう機会も持つことができた。

教室に関しては、毎回教室に通ってくる生徒たちは熱心に勉強をするタイプが多い。一般的には外国人生徒は言語の壁や文化的背景の違いから低学力が指摘されているが、彼らはそれほど学校の勉強に遅れをとっていることはない。ただ不定期に教室に通う生徒の中には基礎力がついていない生徒も多く存在する。このように生徒間の学力には差があり、個別に対応していく必要がある。現在の支援は学生が生徒に1対1でついているので、その点では柔軟な対応がとれている。学習方法は生徒が各自宿題などの教材を持ってきて、わからないところを学生が教えるという方法である。支援に入った6、7月は書き取りや計算ドリルなどひとりでできる勉強をしている生徒が多く対応に困ったこともあったが、現在はそうした学習をする生徒は減っており、一緒に考えることができる問題集を持ってくる生徒が多い。生徒は主に学校の宿題など基礎的な学習をしているが、中3の生徒は別室で受験勉強に力を入れており、進学に向けた取り組みもなされている。

問題点と今後の方針

問題点としては、同じ大学生が毎回参加できず、各自参加できるときに支援に行っているために継続的な支援（宿題を出しても、次週チェックができないなど）が難しいことがある。また、教室に参加している中高生は固定されたメンバーが来るのみで、15名の登録があるにも関わらずいつも少数の同じ生徒しか来ていない。今後はこうした状況を改善し、学生側の支援体制の整備、中高生への支援の幅を広げる必要がある。継続的な支援体制の整備としては、11月から生徒個別のファイルをつくり、毎回指導した先生または学生がファイルに記入して、支援者同士が生徒の学習状況を共有できるような取り組みを行っている。支援の幅を広げる点については、センターで中高生向けのイベントを行ったり、地域の中学校を訪問するなどして生徒を増やしていくつもりである。それとともに、プロジェクトの活動境域を広げることも視野に入れ、センターでの学習支援教室とは別に浜松市でも同様の外国人中学生を対象とした学習支援教室を学生主体で始めることを検討している。

参考資料

- ・磐田市多文化交流センターの中学生への学習支援に関する覚え書き
磐田市市民活動推進課長と研究代表者の池上の間で締結した覚え書き
- ・静岡新聞記事（平成23年6月28日（火）夕刊 p.2）
「磐田市 地域 大学 外国人中学生に学習支援の輪 夜間教室、進学後押し」
- ・磐田プロジェクトブログ（学生たちの活動記録）

<http://hikouki2977.blog62.fc2.com/>

プロジェクト全体のイメージ図

